

ライフスタイルが住居観におよぼす影響と住情報・住教育

○ 久保加津代

(大分大)

目的 40歳代・50歳代は、高齢期の住生活にむけて、具体的に検討しはじめる時期だといわれている。多様化する高齢期の生活像・住居観をあきらかにし、ライフスタイルに対応した住情報の支援や住教育のあり方を検討することがこの研究の目的である。

方法 ①アンケート調査 対象：大分県内の40歳代・50歳代の男女408名。時期：1999年9～10月。有効回収票数：252（男性70・無職女性113・有職女性69（うち単身16））。有効回収票率：61.8%。②ヒアリング調査 豊かな後半生を考える会（女性G）。

結果 ①全般的に、高齢期には夫婦で暮らしたいというものが多かったが、男性・無職女性・有職女性・単身女性で、住居観や準備姿勢に違いがみられた。②男性は、高齢期には、家族と、郊外の和風の広い住宅に住みたいものが多く、準備意識は低かった。③女性は、男性に比べれば、市街地の機能的な住宅に住みたいものが多く、施設・設備等への要望も強かった。貯金や情報収集などの準備もはじめていた。④なかでも、有職女性は準備意識や施設・設備への要望が強かった。⑤全般的に、戸建て持家に関する情報や商品情報の認知度が高く、これへの関心も高かった。⑥しかし、多様なニーズに対応した住情報の入手は困難で、高齢期の多様な住生活像とこれを実現していくための具体的な情報の提供や、住教育が課題である。